京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

2022　年 9　月 5　日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　藤　　洋 作　様

所属部局・研究科　アジア・アフリカ地域研究研究科　アフリカ専攻

職 名・学 年　　助教

氏　　名　　齋藤 美保

助成の種類	**令和４年度　・　国際研究集会発表助成**		
研究集会名	国際行動生態学会・2022年大会		
発表形式	□ 招待　・　□ 口頭　・　■ ポスター　・　□ その他（　　）		
発表題目	Housing with male triggers higher aggressive behaviors in female giraffe		
開催場所	スウェーデン・ストックホルム・ストックホルムウォーターフロント会議センター		
渡航期間	2022年 7　月 27　日　～　　2022年　8 月 2　日		
成果の概要	**タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　■ 無　□ 有（　　）**		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000 円	
	使用した助成金額	300,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	費目	金額（円）
		航空券代および国内外交通費	120,000
		学会参加費	88,000
		宿泊費	60,000
		滞在費	32,000
当財団の助成について	（今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。） 航空券代が値上がりし、円安が急速に進んでいた中で、今回このような助成を頂いたこと、大変感謝しております。また、助成決定後に日程変更が生じた際も、柔軟にご対応くださり、感謝申し上げます。		

成果の概要／齋藤美保

国際研究集会発表助成制度から助成いただき、7 月 28 日～8 月 2 日まで、スウェーデンのストックホルムで開催された国際行動生態学会（International Society for Behavioral Ecology Congress 2022・ISBE2022）・2022 年大会に参加させて頂きました。本学会が発行するジャーナルである Behavioral Ecology は、動物行動生態学分野においてはトップレベルのジャーナルであり、ISBE2022 には、動物生態学や動物行動学を専門とする方々がヨーロッパ各国、アメリカ、台湾といったように、世界中から参加していました。 6 日間におよぶ大会期間中には、対捕食者戦略、社会行動、養育行動といった多岐にわたるテーマに分かれ、400 題を超える口頭発表、300 題を超えるポスター発表が行われました。

私はこれまではタンザニアで野生キリンを対象に動物行動学に関する調査を行ってきましたが、コロナ感染症の影響で海外渡航ができない中、初めて飼育下で行った行動観察に基づく研究成果を発表しました。具体的には、飼育下のキリンの三者関係に着目し、オスとの同居時には高順位のメスから低順位のメスに対する攻撃的行動が増えることを明らかにした内容について発表しました。そこから、近年注目を浴びている動物園動物に対する動物福祉の実現に向けた課題や、野生とは状況が大きく異なる飼育下という環境におけるキリンの社会関係について議論しました。本学会で「動物福祉」をキーワードにした発表は多くなかったものの、2 時間にも及ぶポスター発表時間中には、ナミビアで野生のキリンを対象に彼らの行動圏に関する研究を行っている方、家畜の福祉向上に関する研究を行っている方、魚類の認知科学に関する研究を行っている方などが立ち寄って下さり、それぞれの参加者とお互いの興味関心について、また各国における最新の研究動向について意見を交わすことができました。日本からの参加者の方からは、本研究を実施することの意義について議論を交わし、今までになかった深い視点を得ることができました。また、本研究ではキリンの糞サンプルから十分なストレスホルモンを測定することができなかった点を問題点として紹介しましたが、その点に関しても専門家の方からアドバイスを頂きました。このような研究を進める上での問題に対するアドバイスは、すでに一つの研究として完成した形で発表される論文発表時には得ることができず、対面での学会でポスター発表をしたことの大きな収穫だと思っており、今後そのアドバイスも取り入れながら実験の修正を重ねていきたいと思います。

対面の国際学会に参加するのは 2018 年以来で、今回久しぶりの国際学会の雰囲気を感じることができ、また世界中で行われている最新の研究に関する情報を得ることができた点は非常に有意義でした。一方で、昨今の動物生態行動学分野の傾向として、ドローンやロガーを利用して、対象動物のデータを一度に数多く集める手法が多く利用されています。その中、私は直接観察を続けてきたため、サンプル数が少ないという問題に対し研究手法の切り替えを迫られているように感じていました。しかし、本学会ではアシカやシカなどを対象に、私と同様の直接観察を行っている研究者の方々が参加され、さらにそれぞれ興味深い発表をされていたため、自身の研究を継続していく大きな励みとなりました。

今後、自身の研究としてアフリカでの獣害対策に関する研究を新たに進めていきたいと考えています。本学会中には、ケニアで家畜と肉食動物の関係についての発表を拝聴する機会があり、自身の研究をデザインする上で非常に重要な知見を得ることができました。また他の発表で、野生の仔ジカを捕獲し、ロガーを付けリリースしてから走り出すまでの時間を測り、そこから仔ジカの性格に言及している研究がありました。タンザニアで野生のキリンの仔どもを研究している私としては、非常に興味深く拝聴し、どこかでこのような研究アイデアを使う機会があればと思います。本学会で得た知見を今後の自身の研究に活かしながら、また研究にまい進したいと思います。

最後になりましたが、京都大学教育研究振興財団助成事業から助成頂いたことで本渡航を実現することができ、また有意義な時間を過ごすことができました。改めて感謝申し上げます。

ISBE2022 のポスター発表会場の様子（上階にポスターが掲示されている）